

# 初期イスラム時代の遠島

高野 太 輔

## Exile in the Early Islamic Period

KONO Taisuke

### I. はじめに

権力者にとって、その存在が望ましくない者（政敵、叛徒、犯罪者、不道德な行為を働く者など）を排除する最も直接的な方法は、「処刑」することである。しかし、現実には様々な理由から相手を殺害することが出来ず、次善の策を講じなければならない場合がある。そのようなとき、初期イスラム時代のアラブ社会では、身体を拘束して自由を奪う「監禁・投獄」、官職からの罷免や財産の没収によって周囲への影響力を奪う「社会的地位の剥奪」、政治的中心地や人口密集地から身柄を遠ざける「遠隔地への追放」など、状況に応じて様々な種類の処罰が実施された。本稿では、こうした権力者による処罰の一形態として、初期イスラム時代のアラブ社会に「遠島」という習慣が存在した事実を指摘し、その具体的な実態を解明していく事を目的とする。

カリフの命令によってムスリムが「追放」された様々な事例を見てみると<sup>1</sup>、大抵の場合、それほど僻地へ追いやった訳ではなく、シリアからヒジャーズへ<sup>2</sup>、イラクからシリアへなど<sup>3</sup>、アラブ＝ムスリムの居住都市間を移動させたに過ぎないケースが多い<sup>4</sup>。つまり、当時の行政的な追放処分とは、当事者をムスリム共同体の外部へ放逐するために行われたのではなく、根拠地における政治的・血縁的紐帯から本人を切り離す事だけに主眼が置かれていたと言ってよいであろう。

しかし、史料の記述を丹念に分析していくと、明らかに“当事者の身体を遠隔地に束縛する”という懲罰の意志が読み取れるケースも、少数ながら存在した事が分かる。それが、本稿の主題である「遠島」——つまり、相手を海上の孤島に追放するという処罰方法である。ウマイヤ朝の場合、その流刑地として利用されていたのは、紅海南部に浮かぶダフラク (Dahlak) 諸島であった。本稿では、このダフラク諸島の問題を中心に、これまで殆ど注目される事のなかった初期イスラム時代の「遠島」について、可能な限り多くの情報を収集し、分析していく事にしたい。

始めに、本稿で利用した文献史料の略号と刊本を記しておく。

- Aghānī* : Abū al-Faraj al-Iṣfahānī (d.356/967), *Kitāb al-Aghānī*, 20vols, Beirut, 1970. (reprint of Būlāq edition)  
——, *Kitāb al-Aghānī*, vol.21, Leiden, A.H.1305.
- Ansāb* : al-Balādhurī (d.ca.250/864), *Ansāb al-Ashrāf*, 14vols, Damascus, 1997-2001.
- Atībbā'* : Ibn Abī Uṣaybi'ah (d.668/1270), *'Uyūn al-Anbā' fī Ṭabaqāt al-Atībbā'*, Beirut: Dār Maktabah al-Ḥayāh, n.d.
- Dhahabī* : al-Dhahabī (d.748/1348), *Siyar A'lām al-Nubalā'*, 4<sup>th</sup> ed., 23vols, Beirut, 1982-6.
- Faraj* : al-Tanūkhī (d.384/994), *Al-Faraj ba'da al-Shiddah*, 5vols, Beirut, 1978.
- Fasawī-1* : al-Fasawī (d.277/890), *Kitāb al-Ma'rifah wal-Ta'rīkh*, 3vols, Baghdad, 1976.
- Fasawī-2* : ——, *Al-Ma'rifah wal-Ta'rīkh*, <http://www.alwaraq.net/>
- Hamdānī* : al-Hamdānī (d.334/945), *Ṣifāh Jazīrah al-'Arab*, Leiden, 1968.
- Hishām* : Ibn Hishām (d.204/819), *Al-Sīrah al-Nabawīyah*, ed. F. Wüstenfeld, 2vols, Göttingen, 1858-60.
- Iqd* : Ibn 'Abd Rabbi-hi (d.328/940), *Al-'Iqd al-Farīd*, 7vols, Cairo, 1946-53.
- Kāmil* : Ibn al-Athīr (d.630/1233), *Al-Kāmil fīl-Ta'rīkh*, ed. Abū al-Fidā' 'Abdallāh al-Qādī, 10vols, Beirut, 1987.
- Khallikān* : Ibn Khallikān (d.681/1282), *Wafayāt al-A'yān wa-Anbā' Abnā' al-Zamān*, 8vols, Beirut, 1977-8.
- Khurdādhbih* : Ibn Khurdādhbih (d.ca.300/911), *Al-Masālik wal-Mamālik*, Leiden, 1889.
- Madīnah* : 'Umar b. Shabbah (d.262/876), *Ta'rīkh al-Madīnah al-Munawwarah*, 2vols, Beirut, 1996.
- Mekka* : Wüstenfeld, F. ed., *Die Chroniken der Stadt Mekka*, 2vols, Leipzig, 1858-9.
- Muntazam* : Ibn al-Jawzī (d.597/1200), *Al-Muntazam fī Ta'rīkh al-Mulūk wal-Umam*, 18vols, Beirut, 1992-3.
- Murūj* : al-Mas'ūdī (d.345/956), *Murūj al-Dhahab wa-Ma'ādin al-Jawhar*, 4vols, Beirut, 1987.
- Ṣafadī* : al-Ṣafadī (d.764/1363), *Kitāb al-Wāfī bil-Wafayāt*, vol.17, Wiesbaden, 1982.
- Shu'arā'* : Ibn Qutaybah (d.276/889), *Al-Shi'r wal-Shu'arā'*, Cairo, 1932.
- Ṭabarī* : al-Ṭabarī (d.310/923), *Ta'rīkh al-Rusul wal-Mulūk*, 15vols, Leiden, 1879-1901.
- Tahdhīb* : Ibn Ḥajar al-Asqalānī (d.852/1449), *Tahdhīb al-Tahdhīb*, ed. Khalīl Ma'mūn Shīḥā, 6vols, Beirut, 1996.
- Tāj* : al-Zabīdī (d.1205/1791), *Tāj al-'Arūs min Jawāhir al-Qāmūs*, 10vols, Egypt, A.H.1306.
- Ya'qūbī* : al-Ya'qūbī (d.ca.292/905), *Ta'rīkh al-Ya'qūbī*, 2vols, Beirut: Dār Ṣāder, 1992.
- Yāqūt* : Yāqūt al-Ḥamawī (d.626/1229), *Mu'jam al-Buldān*, 5vols, Beirut: Dār Ṣāder, n.d.
- Zamakhsharī* : al-Zamakhsharī (d.538/1144), *Al-Jibāl wal-Amkinah wal-Miyāh*, Leiden, 1855.

## II. ダフラク諸島への遠島

### (1) 流刑地としてのダフラク諸島

ダフラク諸島(現エリトリア領)とは、マッサワ(Maṣawwa‘)の東方沖に位置する大小120以上の島々である。ダフラク・アルカビール島(Dahlak al-Kabīr)とヌーラ島(Nūrah)が最大の島で、他にも無人の小島が多数点在している。自然環境が厳しいために農業・牧畜は難しく、少数の住民が漁業や真珠採取で生計を立ててきたというが、この島々はむしろ、紅海航路上の重要な停泊地として、古代からその名を諸国に知られていた。『エリュトラ海案内記』に記されているアラライウー諸島<sup>5</sup>という地名や、プリニウスの『博物誌』にあるアリアエオス諸島<sup>6</sup>が、このダフラク諸島を指すのではないかと考えられている。

イスラムが誕生する直前のダフラク諸島は、アクスム王国の影響下にあった<sup>7</sup>。後代のアラビア語史料によると、ズー・ヌワース王 Dhū Nuwās を倒すためにアクスム王国のネグス(al-Najāshī)が派遣したエチオピア軍は、「ダフラクから[海を]越えてサヌアに入った<sup>8</sup>」と記されている。この話の真偽はともかく、同諸島がイエメン(al-Yaman)とエチオピア(al-Habashah)を結ぶ航路上の要の位置にあったことは間違いない。

次章で詳しく検討するが、遅くとも8世紀前半までの時期に、ダフラク諸島はアラブ＝ムスリムの影響下に入った。この島々について、アラビア語地名辞典の *Yāqūt* は、以下のように記している。

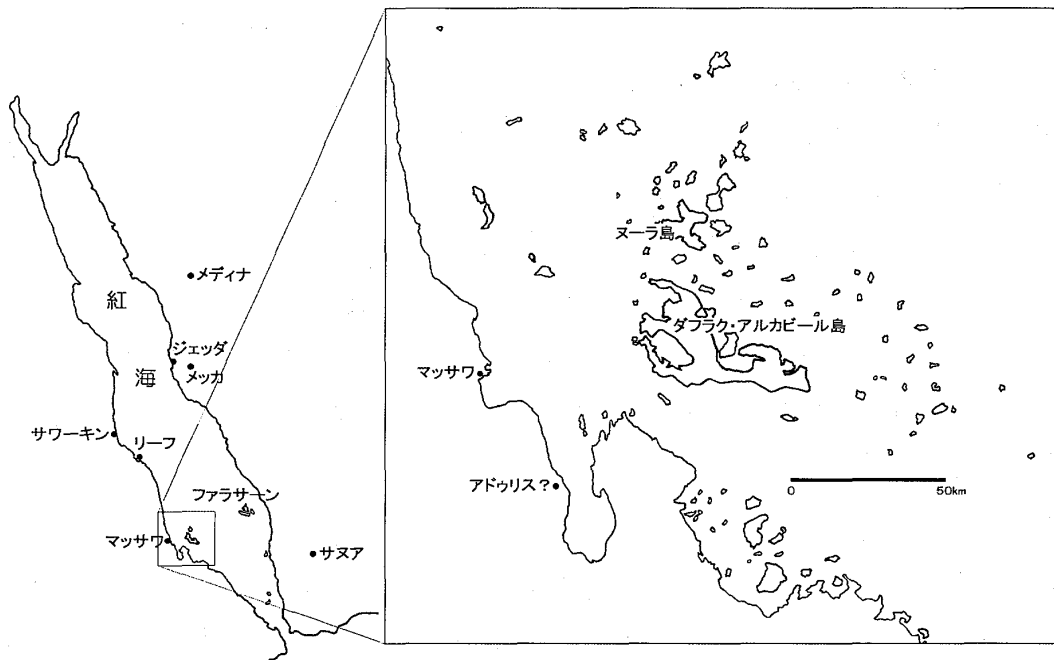
[ダフラクとは] イエメン海の島であり、イエメンとエチオピアの間の停泊地(mursā)である。土地は狭く、窮屈で、暑さは厳しい。ウマイヤ家[のカリフ達]の不興を買った者は、この地に追放された。<sup>9</sup>

また、*Khallikān* も次のように述べている。

[ダフラクとは] アイザーブ海(Baḥr ‘Aydḥāb)にあるサワーキン(Sawākin)に近い島で、カリフ達は処罰すべき人物をそこに拘置した(ḥabasa)。<sup>10</sup>

さらに、*Ṭabarī* 100/718-9年の記事に収録されたヤズィード・ブン・アルムハッラブ Yazīd b. al-Muḥallab の逮捕<sup>11</sup>に関する伝承の中には、次のような記述がある。

ヤズィード[・ブン・アルムハッラブ]が[財産の]明け渡しを一切拒否すると、ウマル[II世]は彼に羊毛の衣服を着せてラクダに乗せるよう命じ、「この者をダフラクへ連れて行け」と言った。ヤズィードは連れ出され、兵士達に引き立てられながら、叫んだ。



【地図】ダフラク諸島

「私には [守ってくれる] 親族がいないのか？ 何故、ダフラクへ流されなければならぬのだ？ ダフラクへ送られるのは、不道德な者 (al-fāsiq) と、不穏分子 (al-murīb) と、泥棒 (al-khārib) だけのはずだ。神に讃えあれ、私には親族がいないのか？」

すると、サラマ・ブン・ヌアム・アルハウラーニー Salāmah b. Nu'aym al-Khawlānī がウマルに近付き、言った。

「信徒の長よ、ヤズィードを元の場所に戻して監禁なさいませ。彼を送り出してしまったら、その一族が奪還を試みるかもしれません。彼の一族は、ヤズィードの件で憤慨しています。」

そこで、ウマルは彼を牢に戻した。<sup>12</sup>

つまり、初期イスラム時代のダフラク諸島は一種の流刑地として認識されており、ウマイヤ朝カリフの命令によって、有害とみなされたアラブ＝ムスリムが追放刑を受ける場所であったということになる。それでは、具体的に如何なる人物が、どのような状況の下で、同諸島へ追放されたのであろうか。また、同諸島が流刑地として利用されるに至った背景とは、何だったのであろうか。以下、これらの問題を順々に検討していきたい。

## (2) 追放を受けた人々

この島々に、どのような罪人が、何名ほど収容されていたのか、網羅的な情報は残念ながら存在しない。しかし、ダフラク諸島へ送られた具体的な人物については、幾つかの記録が残っている。

例えば、以下に挙げたのは、ウマイヤ朝時代中期に活躍した詩人アフワス al-Aḥwaṣ ‘Abdallāh b. Muḥammad al-Anṣārī (110/728-9 年没)<sup>13</sup> の追放に関する記録である。アンサールの子孫である彼は、ワリード I 世 al-Walīd b. ‘Abd al-Malik (位 86-96/705-15 年) の寵を受けた詩人であったが、その不品行や不道徳な詩作を政敵から非難され、ダフラク諸島に追放された<sup>14</sup>。

スライマーンは [メディナの] 知事 (‘āmil) に書簡を送り、彼 [=アフワス] を百回の鞭打ちに処し、人々の前に晒し者とした上で、ダフラクへ送るよう命じた。[知事は、] その通りにした。彼は、スライマーン・ブン・アブド・アルマリクの治世中、その地に留まった。やがて、ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズ ‘Umar b. ‘Abd al-‘Azīz [=ウマル II 世] の治世となった。[アフワスは] 彼に書簡を送り、都へ上って頌詩を捧げる許可を求めたが、拒否された。…… アンサールの人々がウマル・ブン・アブド・アルアズィーズの許へ来て、彼 [=アフワス] を呼び戻すよう求めた。

「貴方は、彼の血筋と、地位と、指導力を御存知のはずです。しかるに、彼は棘草の地 (arḍ al-shawk) に追い出されたままです。彼を、一族の居地である神の使徒のハラム [=メディナ] へ戻して下さるよう、要求いたします。」<sup>15</sup>

結局、ウマル II 世 (位 99-101/717-20 年) はアフワスを赦さず、そのままダフラクに留め置いたが、彼の詩を気に入ったヤズィード II 世 Yazīd b. ‘Abd al-Malik (位 101-5/720-4 年) によって漸く解放され<sup>16</sup>、その後は宮廷の御用詩人として活躍したと言われている。

一方、アフワスと同時期に活躍したクライシュ族の詩人ウマル・ブン・アビー・ラビーア ‘Umar b. ‘Abdallāh b. Abī Rabī‘ah<sup>17</sup> に関しても、ダフラク諸島に追放されたという情報がある。

ウマル [・ブン・アビー・ラビーア] は、不道徳にも巡礼中の女達に言い寄り、彼女らに対する恋の詩を詠ったので、[カリフの] ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズは、彼をダフラクに追放した。海上に出ると、彼の乗った船が火事になり、他の者ともども焼け死んだ。<sup>18</sup>

この伝承に従えば、ウマル・ブン・アビー・ラビーアはダフラク諸島に追放されたものの、その途上で船舶火災により死亡した、という事になる。しかし、彼の処分に関しては史料によって全く異なる情報が伝えられており、はっきりしない点が多い。例えば、*Aghānī* や *Muntaẓam* に収録されたズバイル・ブン・バツカール Zubayr b. Bakkār の伝承によると、ウマル・ブン・アビー・ラビーアは確かに追放を命じられたが、二度と頹廢的な詩を詠わないとウマル II 世に誓ったので、無事に「釈放された (khallā-hu)」と記されている<sup>19</sup>。同じ *Muntaẓam* の記事には、ダフラクへ行く途中で焼死したのはアフワスであるという説が紹介されているなど、情報の混乱が甚だしいため、ウマル・ブン・アビー・

ラビーアの追放に関しては、アフワスの話と混同されて生じた可能性も否定できない。

上記のアフワスと入れ違いになる形でダフラク諸島に追放されたのが、メディナの法学者アッラーク ‘Arrāk b. Mālik al-Ghifārī である。

ズバイル・ブン・バッカーがムハンマド・ブン・アッダッハークから聞き、彼はムンズイル・ブン・アブドッラーから聞いて、言った。

アッラーク・ブン・マーリクは、ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズの最も熱心な支持者で、マルワーン家が取得したファイや不正蓄財の没収に協力した。ヤズィード・ブン・アブド・アルマリクが即位すると、アブド・アルワーヒド・アルバスリー ‘Abd al-Wāhid al-Baṣrī がメディナ知事となった<sup>20</sup>。彼は、「あの正しい御方の友人ならば」と言ってアッラークに近付き、仲良くなった。ある日、彼がアッラークと共にいると、ヤズィードの書簡が到着した。

「アッラークに衛兵を付けて、ダフラクへ送れ。アッラークからは、駄獣を取り上げよ。」

アブド・アルワーヒドは、衛兵に言った。

「アッラークの手を取れ。彼の財産で、[乗っていくための] ラクダを買え。彼をダフラクへ連れて行き、そこに住ませよ。」

そこで、衛兵は言われた通りにした。<sup>21</sup>

つまり、ウマルⅡ世の政策に圧力を受けていたヤズィードⅡ世が即位したことにより、前者の支持者であったアッラークが、追放処分を受けたという事になる<sup>22</sup>。アッラークの余生に関して、上記の史料は何も語っていないが、後代の *Dhahabī* に拠ると、「ヤズィード [Ⅱ世] の治世中に現地で死亡した<sup>23</sup>」とある。また、*Aghānī* の記事に拠ると、「ダフラクの人々は、アフワスから詩を習い、アッラーク・ブン・マーリクからフィクフを習った<sup>24</sup>」とも記されている。

ダフラク諸島に追放された別の人々として、カダル派 (al-Qadariyah) の名も史料に挙げられている。ガイラーン Ghaylān b. Muslim<sup>25</sup> がダマスカスで処刑された後、一部のカダル派はダフラク諸島へ追放処分を受けた。以下に挙げるのは、その一人であるアムル・ブン・シャラーヒール Abū al-Mughīrah ‘Amr b. Sharāhīl al-‘Ansī が述べたとされる伝承である。

アフマド・ブン・ズハイルが、私に語った。アフマドはアリー [=マダーイニー] から、アリーはヤズィード・ブン・マサード・アルカルビーから、ヤズィードはアムル・ブン・シャラーヒールから聞いて、語った。アムル・ブン・シャラーヒールは言った。

ヒシャーム・ブン・アブド・アルマリク Hishām b. ‘Abd al-Malik は、我々をダフラク諸島に追放した。我々は、ヒシャームが死ぬまで、そこに居た。ワリード [Ⅱ世] が即位すると、我々の件が持ち上げられたが、ワリードは [一切の恩赦を] 拒んで言った。

「神かけて、ヒシャームがカダル派を殺害して追放した以上は、私から恩赦を与えるべき理由など何もない。」

我々の監視役だったハッジャージュ・ブン・ビシュル・ブン・ファイルーズ・アッダイラミー al-Hajjāj b. Bishr b. Fayrūz al-Daylamī は、常々言っていた。

「ワリードは、せいぜい一年半で殺されるよ。彼が殺されたら、その一族は破滅だろうな。」<sup>26</sup>

予言通りにワリード II 世 al-Walīd b. Yazīd (位 125-6/743-4 年) が殺害された後、ダフラク諸島にいたカダル派の人々がどうなったのか、史料に情報は見当たらない。しかし、追放された当人であるアムル・ブン・シャラーヒールの証言が伝えられているという事は、何らかの方法によって彼らがダフラクから帰還した事を示唆しているとも考えられる。

上記の伝承に拠ると、ダフラク諸島にはカダル派の監視役としてハッジャージュ・ブン・ビシュルなるダイラム人が常駐していたことになるが、この人物が、カダル派の人々が追放された時に随行した監視役に過ぎないのか、それともダフラク諸島の監督を恒常的に任されていた人物なのかは、判然としない。ダフラク諸島の行政上の扱いに関しても、メッカもしくはメディナ総督の監督下にあったのか、バスラ総督の監督下にあったのか、それとも実質的に半独立の状態にあったのか、具体的な情報は皆無と言って良い<sup>27</sup>。

ダフラク諸島への遠島は、ウマイヤ朝時代だけではなく、アッバース朝時代 (132-324/749-936 年) 初期にも行われていた形跡がある。141/758-9 年、ホラーサーン総督のアブド・アルジャッバール ‘Abd al-Jabbār b. ‘Abd al-Rahmān al-Azdī がマンスール al-Manṣūr (位 136-58/754-75 年) に叛乱を起こそうとしたとき、カリフは機先を制して皇子ムハンマド Muḥammad b. al-Manṣūr (後のマフディー al-Mahdī) を司令官とする討伐軍を派遣した。その結果、アブド・アルジャッバールは逮捕されて斬首となったが、息子達は処刑を免れて、ダフラク諸島へ送られている。

マンスールはアブド・アルジャッバールの息子達を、イエメン沖の島であるダフラクに送るよう命じた。彼らは暫くダフラクに流されていたが、やがてヒンド人 (al-Hind) が彼らを攻撃し、他の人々と共に捕虜となった。……一部の者は救出されたが、その中にはアブド・アルジャッバールの息子アブド・アッラフマーンも混じっていた。彼はディーワーン (dīwān) に登録され、代々のカリフに仕え、ハールーン治世の 170 年にエジプトで死んだ。<sup>28</sup>

原文中に「ヒンド人」とある人々が、具体的にどの地域から来たのかは漠然としていて分からないが、必ずしもインド亜大陸から渡ってきた海賊であるという確証はなく、アラビア海沿岸を活動範囲とする近隣の海上民だった可能性もある。J. Cuoq は上記の伝承に関して、「このインド人の侵入というのは驚くに当たらない。この時すでに、中国やインド諸国の船乗りは、アフリカ東海岸へ頻りに現れて

いたからである」と述べているが<sup>29</sup>、ダフラク諸島を襲った人々の正体を、それだけの理由で断定するのは無理がある。また、類似の伝承を伝えている *Ansāb* の記事では、「ヒンド人」という箇所が「エチオピア人 (al-Habashah)」になっており<sup>30</sup>、どちらが正しいのか、現存する史料からは判断できない。

ダフラク諸島へ送り込まれた人物として具体的な名前が分かっているのは、以上である。これらの史料から幾つかの情報を読み取るとすれば、(1) ダフラク諸島への追放は、少なくとも第二次内乱終結後のウマイヤ朝時代から、アッバース朝時代の初期まで続いた事、(2) 政治犯、思想犯、不品行の目立つ者など、様々な種類の罪人が流されている事、(3) 追放後に生還した人物の例が複数報告されている事、などが確認できよう。また、追放された者が流刑地において牢獄に監禁されたり、強制労働に従事させられたとする記録が見当たらない点にも、特徴がある。

### III. 遠島の起源

#### (1) ダフラク諸島の占領をめぐる議論

ダフラク諸島への遠島は、いつ頃から始まったのだろうか。また、なぜ同地がウマイヤ朝時代の追放先として使われたのであろうか。この問題を考えるためには、まずダフラク諸島がアラブ＝ムスリムの支配下に入った時期と、その具体的な状況を明らかにしなければならない。

上述の通り、ダフラク諸島は元来、阿克苏ム王国の影響下にあった。それでは、この島々にアラブ＝ムスリムが初めて上陸したのは、具体的に何年頃の出来事なのであろうか。ダフラク諸島からは、墓碑などの考古学的資料が数多く出土しているが、日付の確認できる最古のムスリム墓は4/10世紀のものであり、かなり後代の製作であるため、ダフラク入植の時期を判定する参考にはなりにくい<sup>31</sup>。そこで、現存する文献史料の中に、アラブ＝ムスリムのダフラク入植を示す記述が存在するかどうか、という点が問題となる。ところが、この問題に関する従来の研究をひもといてみると、一つの奇妙な事実が浮かび上がってきた。以下に挙げるのは、様々な事典や概説書に登場する、ダフラク諸島関係の記述である。

- ① 紅海交易を守るため、ムスリムはマッサワ沖のダフラク諸島を7世紀に占領した。……紅海交易を守るために西暦650年頃マッサワ沖のダフラク諸島を占領してからは、ムスリムによる東アフリカへの侵入が徐々に進行した。<sup>32</sup>
- ② ごく初期の頃、つまり七世紀から、イスラム教徒はその中の最大の島ダフラク・アル・カビールを占領し……。<sup>33</sup>
- ③ 1/7世紀にムスリムによって占領されたダフラク・アルカビール島は……。<sup>34</sup>



上記いずれの文献にも、アラブ＝ムスリムは7世紀にダフラク諸島を占領した (occupied) と書かれている。ところが、これらの事典や概説書には註も典拠も示されておらず、どのような史料的根拠によって上記の説が導き出されたのか、全く解説されていない<sup>35</sup>。

一方、アラブ＝ムスリムがダフラク諸島を占領した時期に関しては、7世紀ではなく、8世紀初頭であったとする説も見られる。

- ④ 例えば702-3年、「アビシニア人」の海賊がジェッダを攻撃したと記録されている。これに対する反応として、8世紀の初頭にムスリム海軍によってダフラク諸島が占領された。<sup>36</sup>
- ⑤ ヒジュラ暦83年(702年)の始め頃、アビシニア人がジェッダを急襲した。メッカの人々が駆けつけ、侵略者を海上まで追いかけた。……8世紀の初頭、ムスリム達は、差し当たってマッサワ沖のダフラク諸島を占領する事で満足していた。<sup>37</sup>

これらの記述の前半部分——つまり、「アビシニア」の海賊が83/702-3年にジェッダを攻撃したという話に関しては、どの文献にも典拠が記されており、史料的根拠が明らかにされている。その根拠とは、ファーキヒー Muhammad al-Fākihī の『メッカ史 (Ta'rikh Makkah)』に登場する、以下のような伝承である。

あるメッカの人が言った。83年の始め頃、エチオピア人(al-Habashah)がジェッダに来て、ジェッダの人々と戦った。メッカから人々が出てジェッダに向かった。指揮官はアブドッラー・ブン・ムハンマド・ブン・イブラーヒームだった。人々は、海上に出撃した。アブドッラー・ブン・ムハンマド・ブン・イブラーヒームは、彼らの部隊長として、アブドッラー・ブン・アルハーリス・ブン・アブド・アルマリク・ブン・アブドッラー・ブン・アビー・ラビーア・アルマフズーミーを任命した。<sup>38</sup>

ところが、記述の後半にある「8世紀の初頭にムスリム海軍によってダフラク諸島が占領された」という部分に関しては、いずれの文献も史料的な根拠を示しておらず、せいぜい他の研究書からの孫引きに留まっている。上記ファーキヒーの伝承を見ても、ムスリム軍が「海上に出撃した」とは書いてあるが、ダフラク諸島に到達したとは一言も書かれていない。それならば、これらの文献の記述は、何を根拠として書かれたのだろうか<sup>39</sup>。

管見の限り、このような説を唱えた最初の研究者は、1952年に『エチオピアのイスラム』を著した J. S. Trimingham である。

83年、アビシニアの海賊がジェッダを襲って略奪した。これがメッカに恐慌を引き起こし、ムスリム側は彼らに対抗する積極的な手段を講じなければならなくなった。紅海交易を守るため、彼らは対岸に投錨地を獲得する決心をし、マッサワ沖のダフラク諸島を占領した（脚註：ダフラクの占領は、詩人アフラスと法学者アッラーク・ブン・マーリクがウマイヤ朝時代に同地へ追放されている事から確認できる。……この島で発見されたアラビア語碑文は、9世紀中頃に遡る。）<sup>40</sup>

つまり、ダフラク諸島が占領されたという話には直接的な根拠があるわけではなく、(1) 83/702-3年にムスリム海軍が紅海に派遣されたという史実、(2) 遅くともスライマーンの治世（96-99/715-7年）以降には、ウマイヤ朝カリフがダフラク諸島への遠島を実施しているという史実、(3) 9世紀中頃に遡るアラビア語碑文が発見されているという事実、以上3つの状況証拠だけを基に、Trimingham自身が提案した一つの仮説に過ぎない、という事になる。あくまでも推測であるが、上記④～⑤の記述は、このTriminghamの説を直接・間接的に採り入れたものなのではないだろうか<sup>41</sup>。ダフラク占領を7世紀としている①～③の文献についても、恐らく何らかの発信源があるのだろうが、残念ながら今回は突き止める事が出来なかった。あるいは、Triminghamの説が引用されていくうちに変形したものかもしれない。逆に言うと、現存するアラビア語史料の情報からは、残念ながらこれ以上の正確な事実は導き出せない、と結論付けるのが妥当であろう。

## (2) アブー・ミフジャンの追放

「ダフラク諸島に追放された」と史料中に明言されている最古の人物は、ウマイヤ朝時代の詩人アフラスである。同島の占領を8世紀初頭とみなすTriminghamの説も、アフラスの事例より前にダフラク諸島への遠島が行われた記録が存在しない、という事実を根拠としている。しかし、これに先立つ正統カリフ時代に、一人のアラブ＝ムスリムが紅海方面に追放されたという有名な伝承がある。それは、ウマル I 世 ‘Umar b. al-Khaṭṭāb (位 13-23/634-44年) によるアブー・ミフジャン Abū Mihjan ‘Abdallāh b. Ḥabīb al-Thaqafī の追放である。

サキーフ族のアブー・ミフジャンは、酒を愛した詩人として有名な人物であり、征服戦争で活躍した勇士としても知られている。カーディスイーヤ (al-Qādisīyah) の戦では、飲酒の罪により軍営内に監禁されていたが、総司令サアド・ブン・アビー・ワッカーズ Sa‘d b. Abī Waqqāṣ の妻を説得して脱獄し、ペルシア軍を相手に鬼神の如き活躍を見せた後、自ら牢獄に戻って神妙にしていたという。

議論を進める前に、まず *The Encyclopaedia of Islam*, New ed. (以下 *EI*<sup>2</sup>) に記載されている “ABŪ MIHĀDJAN” の項目を見ておきたい。

……彼は 9/631-2 年に改宗し、カーディスイーヤの戦に参加した。伝承に拠ると、この戦争に参加するため、彼はまず自分の護送人から逃げ出した。というのも、ウマルが彼をハダウダ (Ḥaḍawda)

へ追放していたからである……。次いで、飲酒罪でサアド・ブン・アビー・ワッカースにより投獄されたが、サアドの妻のお陰で、何とか一時的に自由を獲得した。結局、戦闘におけるこの詩人の活躍が——それは歴史家達によって幾分誇張されているものの——総司令官から恩赦を勝ち取る事になった。……16/637年、彼は再びウマルによってナースィウ (Nāṣi') に追放され、間もなく死去した。一説に、彼の墓はアゼルバイジャンもしくはジュルジャーンの国境地帯で見かけられたという。……彼がウマルによって何度も (several times) 追放される原因となったのは、こうした [飲酒禁止の戒律に逆らおうとする] 態度であった。

かなり支離滅裂な記事なので内容を整理すると、(1) アブー・ミフジャンはウマル I 世によってハダウダ (Ḥaḍawḍa) という場所に追放されたが、護衛の目を逃れて脱出し、カーディスイーヤの戦に参加した、(2) 戦地では総司令官のサアド・ブン・アビー・ワッカースによって投獄されたが、脱獄して勇猛な働きを見せたため、罪を赦されて釈放された、(3) 16/637年に、再びウマルによってナースィウ (Nāṣi') に追放され、その直後に死んだ、(4) 彼はウマルによって何度も追放された、以上の4点に要約できよう。

アブー・ミフジャンの追放を分析する事は、ウマイヤ朝時代においてダフラク諸島への追放が習慣化した事実の背景を探る上で、有益な情報をもたらす可能性がある。この節では、一次史料に記された彼の追放に関する伝承を詳しく分析すると同時に、上記 *Et*<sup>2</sup> の記事が本当に正しいのかどうかを、合わせて検討したい。

まず、最も詳しい *Aghānī* に記された情報から見ていく事にする。

アリー・ブン・スライマーン・アルアフファシュが、ムハンマド・ブン・アルハサン・アルアフワルから聞き、彼はイブン・アルアラービーから聞き、彼はムファッダルから聞いて、私に伝えた。

アブー・ミフジャンの飲酒が度重なり、[カリフの] ウマル・ブン・アルハッターブが何度ハッド刑を課しても止めなかったので、ウマルは彼をハダウダー (Ḥaḍawḍā) という海上の島へ追放した (naḑā)。彼と共に、イブン・ジャフラー Ibn Jahra' という監視役 (ḥarasī) も送り込まれた。アブー・ミフジャンは、海岸で彼のもとから逃げ、サアド・ブン・アビー・ワッカースの陣へ行った……。

イブン・アルアラービーがイブン・ダーブから聞いた話によると、ウマルが彼を追放した理由は、以下の通りである。アブー・ミフジャンは、シャムース Shamūs という名のアンサールの女性に懸想した。彼は、何とかして彼女の姿を見たいと、あれこれ方策をめぐらせたが、出来なかった。そこで、彼女の家の横にある農園 (ḥā'it) の仕事に雇って貰い、庭の壁穴から彼女を覗いた。……これを彼女の夫がウマル・ブン・アルハッターブに申し立てたので、ウマルは彼をハダウダー

に追放した……。

アブー・ミフジャンとイブン・ジャフラーが海岸へ着き、船に近付こうとしたとき、アブー・ミフジャンは羊を買い求めて、イブン・ジャフラーに言った。

「朝食にしよう。」

彼は、小麦粉を出すようなふりをして藁袋に飛びつき、剣を取りだした。イブン・ジャフラーは、彼の手に剣が握られているのを見ると、その場を走って逃げ、ラクダに跨って、ウマルのもとへ戻り、事情を報告した。<sup>42</sup>

上記の伝承に拠れば、アブー・ミフジャンはウマル I 世によってハダウダーなる海上の島に追放されたが、海上に出る前に監視役を脅して逃亡した、という事になる。このハダウダーという地名に関して、*Yāqūt* の “*Ḥadawdā*” の項目には、次のように書いてある。

西方の山。ジャーヒリーヤ時代のアラブは、放逐すべき者 (*khula‘ā*) をそこへ追放した。ハーズィミーによると、[その名は] アリフ無しでハドゥード (*Ḥadūd*) と綴り、海上の島である。

管見の限り、ハダウダーの正確な位置を記した史料も、誰かが実際にハダウダーへ追放されたという情報も見つからなかったため、これが実在の場所であるのか、単なる伝説上の地名に過ぎないのかは、判断としない。後代の史料だが、ザマフシャリー (538/1144 年没) は「一説に、海上の山」<sup>43</sup>、ザビーディー (1205/1791 年没) は「ハダウダーまたはハドゥード、海上の山または海上の島、アラブは放逐すべき者をそこへ追放していた」<sup>44</sup> と記している。

これらの記述が何らかの事実を反映していると仮定するならば、ハダウダーの正体として考えられるのは、紅海上の島々である。しかし、紅海上には、ダフラクやファラサーン (*Farasān*) のような洋上の群島ばかりでなく、サワーキン (*Sawākin*)、リーフ (*al-Rīḥ*)、マッサワなど、アフリカ大陸沿岸の島々にも古くから港市があり、どの場所を念頭に置いているのかは、特定するのが困難である。

上記の伝承に続いて、*Aghānī* では、カーディスイーヤの戦に駆けつけたアブー・ミフジャンの活躍が延々と紹介されている<sup>45</sup>。その後、飲酒を理由としてウマルに鞭打ちされたという話が出てくるが<sup>46</sup>、これは前掲の伝承とは別系統の情報であり、カーディスイーヤの戦より後の話と考えるべき理由はなく、むしろ「ウマル・ブン・アルハッターブが何度ハッド刑を課しても止めなかった」という箇所当たる話であろうと考えられる。

*Aghānī* の記事は、アブー・ミフジャンの墓をアゼルバイジャンまたはジュルジャーンで見たとする人物の話の最後に締め括られているが<sup>47</sup>、ここで注目したいのは、カーディスイーヤの戦においてアブー・ミフジャンが赦免された後、あらためて何処かに追放されたという記述が、全く見当たらない点である。つまり、*Aghānī* の記載する情報だけを見る限り、アブー・ミフジャンの追放はハダウダー

に流されかけた一回のみであって、何度も追放されたわけではないのである。類似の伝承を伝える他の史料としては、*Madīnah* や *Safadī* があるが<sup>48</sup>、いずれもアブー・ミフジャンの追放先として「ハダウダー」という語句を挙げているのみであり、あらためて追放があったという記述は存在しない。

一方、*Tabarī* 16/637-8年の記事に収録されたワーキディー *al-Wāqidi* の伝承よると、アブー・ミフジャンが追放されたのは「バーディウ (*Bādī'*)」であったと記されている。

ワーキディーは言った。この同じ年[16/637-8年]、ウマルはアブー・ミフジャン・アッサカフィーをバーディウに追放した (*gharraba*)。<sup>49</sup>

ここに出てくるバーディウとは、*Yāqūt* に「イエメン海の島」と書かれている地名であり<sup>50</sup>、その正確な位置に関して長らく議論があった。マッサワを指すという説がある一方で、近年ではスーダン東岸のリーフを指すという説が有力であるという<sup>51</sup>。

上記の伝承と同系統と推測されるが、追放先の地名が「バーディウ」ではなく「ナースイウ」になっている史料も存在する。

この年 [16年]、ウマル・ブン・アルハッターブが、アブー・ミフジャン・アッサカフィーをナースイウ (*Nāsi'*) に追放した (*gharraba*)。<sup>52</sup>

「バーディウ」と「ナースイウ」はアラビア文字で点の位置が違うだけなので、恐らく同一の語句を指すと考えてよいだろう<sup>53</sup>。問題は、このワーキディー系統の伝承と、前掲 *Aghānī* の伝承とを組み合わせ、アブー・ミフジャンが何度も追放されたと考えてよいのかどうかである。前述の通り、アブー・ミフジャンの追放先として「ハダウダー」なる地名を挙げている伝承は、いずれの史料においても、彼が再び別の土地へ追放されたという情報を含んでいない。また、追放先として「バーディウ」または「ナースイウ」という地名を挙げているワーキディーは、現存する様々な史料のいかなる箇所においても、アブー・ミフジャンがそれ以前に別の土地へ追放されたという伝承を伝えていない。つまり、この二種類の伝承はクロノロジカルに配置すべきものではなく、同一の情報を扱った記事である可能性を否定できないのである。

*EI*<sup>2</sup> の説明文が、この二種類の伝承を別物として扱ったのは、追放先の地名が異なっているという単純な理由もあろうが、具体的な年代が明示されている点も重視されたと推測される。つまり、ハダウダーへの追放は、一般に 14/635-6年とされているカーディスーヤの戦があった年であり、バーディウ (ナースイウ) への追放は 16/637-8年と書かれているからである。

しかし、*Tabarī* の記述をよく読むと、タバリー自身はカーディスーヤの戦を 14/635-6年と見なしているが、ワーキディーは 16/637-8年説を採っていたと書かれている<sup>54</sup>。その彼が、アブー・ミフジャン

ンの追放を 16/637-8 年としているのなら、ワーキディーのクロノロジーでは、カーディスイーヤの戦と同じ年にアブー・ミフジャンがバーディウに追放された事になる。つまり、戦争が始まる前に流されかけた場所を、ハダウダーではなくバーディウと表現しているに過ぎない、と解釈する方が合理的なのである。

それでは、なぜ同一の事象に関して、二つの異なる地名が伝えられているのであろうか。注目したのは、*Aghānī* に出てくるハダウダーという地名の由来である。*Madīnah* に記載されている並行記事を見ると<sup>55</sup>、アブー・ミフジャンが流されかけたのは「海上 (al-bahr)」としか書かれておらず、流刑地の具体的な名前は明らかにされていない。しかし、直後に紹介されているアブー・ミフジャンの詩の中に、「ハダウダーへ (ilā Ḥadawdā)」という語句が出てくる。上述の通り、ハダウダーが流刑地としての「西方の山」「海上の島」を漠然と表す言葉だったとすれば、この詩句は具体的な地名を指していると言うよりも、「流刑の地へ」という意味の代替語であった可能性が強い。つまり、この *Madīnah* に収録されている系統の伝承には、具体的な地名情報が入っていないと見る事が出来るのである。*Aghānī* では本文の方にもハダウダーという単語が出てくるが、これは詩行から独立して伝えられた情報と言うよりも、詩行の中にある語句を後から抜き出したに過ぎないと考える方が自然であろう。

アブー・ミフジャンの追放がカーディスイーヤの年に起きた単発の事件であったとすれば、海上へ出る直前に逃亡したのであるから、目的地には到達していない事になる。その後、詩人アフワスがダフラク諸島へ流されるまでの約 80 年間、紅海方面に追放されたという人物の記録は、未遂も含めて、全く残っていない。つまり、実際に紅海方面へ流された最古のアラブ＝ムスリムは、ウマイヤ朝時代中期のアフワスなのである。

このように考えてくると、アブー・ミフジャンがバーディウ (ナースイウ) への追放を命じられたという話自体も、事実かどうか非常に疑わしくなる。預言者ムハンマドの時代に多くの教友がエチオピアへ亡命した事を考えれば、ウマル I 世の時代に紅海の対岸へ追放された人物がいても不思議ではない。しかし、アブー・ミフジャンの事例のみが極端に古い時期に属しているという点を考慮すると、この話はむしろ、後代の習慣をウマル I 世の時代に投影したものと見なす方が適切ではないだろうか。

いずれにせよ、ここで強調しておきたいのは、アフワスがダフラク諸島に送り込まれるまで、アラブ＝ムスリムが紅海方面に追放されたという伝承が、一つも記録されていないという事実である。言い換えれば、ダフラク諸島への遠島という習慣は、現存する文献史料を見る限り、何の先例もなく突如として始まったという事になるであろう。

## IV. 遠島の停止

### (1) 遠島先の変容

ダフラク諸島への遠島は、マンスール治世にアブド・アルジャッバールの息子達が流された事例を

最後に、史料から姿を消してしまう。事例数は少ないが、これに代わって記録に現れるのは、地中海のクレタ (Iqrīṭash) 島および北アフリカ沿岸地域への流刑である。

例えば、ムンタシル al-Muntaṣir (位 247-8/861-2 年) の宰相を務めたイブン・アルハスィーブ Aḥmad b. al-Khaṣīb b. ‘Abd al-Ḥamīd が、248/862-3 年にムスタイン al-Musta‘īn (位 248-52/862-6) によってクレタ島に追放されたという記録がある。

ムスタインは、彼 [イブン・アルハスィーブ] に怒り、西方 (al-Maghrib) へ追放した。就任四ヶ月目のことであった。彼は、海路でクレタ島に送られ、後にカイラワーン (al-Qayrawān) へ移された。<sup>56</sup>

また、同じ年にムスタインがウバイドッラー・ブン・ヤフヤー・ブン・ハーカーン ‘Ubaydallāh b. Yahyā b. Khāqān をバルカ (Barqah) に追放したという事例も見られる<sup>57</sup>。カイラワーンやバルカは北アフリカにあるため陸続きであるが、イラクからの距離を考えれば、実質的には遠島と同じ感覚であったかもしれない<sup>58</sup>。さらに、方向は逆になるが、244/858-9 年にムタワッキル al-Mutawakkil (位 232-47/847-61 年) が典医ブフティッシュー Bukhtīshū‘ をバフライン地方 (al-Bahrayn) に追放したという記録や<sup>59</sup>、311/923-4 年に宰相アリー・ブン・イーサー ‘Alī b. ‘Īsā b. al-Jarrāḥ がサヌアに追放されたという話もある<sup>60</sup>。しかし、アフリカ紅海岸の島々に追放されたと伝えられる人物は、アッバース朝が実質的に滅亡する 324/936 年まで、全く見当たらない。

## (2) その後のダフラク諸島

Cuoq に拠ると、アッバース朝中期のラシード治世 (170-93/786-809 年) に、ダフラク諸島で反乱のあった事を示す記事が、マクリーズィー al-Maqrīzī (845/1442 年没) の *Khīṭaṭ* に見られるという<sup>61</sup>。この記事は、ダフラク諸島に派兵する事が適法かどうか、ラシードがメディナのマーリク・ブン・アナス Mālik b. Anas (179/795 年没) に質問し、後者がこれに回答するという内容のもので、実際に派兵があったかどうかは記されていない。Cuoq は、この反乱を煽動したのが、同地に亡命したアリー党、ザイド派、ウマイヤ家の残党などである可能性を指摘している。

一方、Fasawī の 177/793-4 年の記事にも、ダフラク諸島に反乱があったという情報がある。

この年、ダフラクの民がムスリム達に反乱を起こした。……177 年サファル月 13 日水曜日、彼らはダフラクにおいて蜂起し、ワーリー (al-wālī) を殺害、同地に居留していたムスリムのうち、逃亡した者を除く一般市民を殺害し、複数のモスクを破壊した。<sup>62</sup>

この記事を読む限り、反乱を起こしたのは非アラブ人の異教徒——恐らくキリスト教徒のエチオピ

ア系住民——であり、シーア派やウマイヤ家の亡命者が煽動したという形跡は見当たらない。ムスリム側が討伐軍を派遣したという記録も無いので、上記の件は混乱状態のまま放置されたのではないだろうか。

この反乱が起きた8世紀末を境として、ダフラク諸島に対するアラブ＝ムスリムの支配権は一時的に弱まったが<sup>63</sup>、10世紀に入ってイエメンのズィヤード朝が進出すると、11世紀後半にはスルタンを名乗る統治者が出現し、ダフラクは独立国の様相を呈したと考えられている<sup>64</sup>。

## V. おわりに

冒頭に述べた通り、初期イスラム時代を通じて、カリフがアラブ＝ムスリムをイスラム共同体の外部へ（つまり異民族・異教徒の住む社会へ）放逐した、という情報は殆ど伝えられていない。行政的な処分としての「追放」は、常にイスラム世界（Dār al-Islām）の内部で完結する事が、当時の習慣であった。ダフラク諸島は、そうしたイスラム世界の最周縁部に位置していたが故に、流刑地として適格であったと考えられる。しかし、イスラム世界を取り巻く周縁地帯の中には、他にも流刑地として利用できそうな場所が無数に存在する。ウマイヤ朝カリフは、なぜダフラク諸島だけを遠島先として選択したのであろうか。

Kh. Y. Blankinship は、この時期にダフラク諸島への遠島が行われた理由として、ウマイヤ朝がアラビア半島方面に「大いなる安全を感じていた」からであると述べている<sup>65</sup>。東ローマ帝国やトルコ系遊牧民などの周辺勢力とは異なり、当時のアクスム王国は歴代のカリフ政権と友好的な関係にあった。「追放先にいるウマイヤ家の敵対勢力を、アビシニア人が解放して利用する」心配が無かったからこそ、同諸島は罪人の流刑地として利用できた、というのがBlankinshipの解釈である。

ところが、問題はそれほど単純ではない。本稿で明らかになった通り、ダフラク諸島への遠島は、ウマイヤ朝時代中期の96/715年前後から、アッバース朝時代初期の141/758-9年まで、約50年間に渡って行われた。その一方で、83/702-3年にはエチオピア人がジェッダを襲ったという伝承があり、177/793-4年にはダフラク諸島で異教徒の反乱が起きたという記録がある。つまり、ダフラク諸島への遠島が実施されていた時期の前後に、紅海周辺では、エチオピア側の攻勢が伝えられているのである。

ダフラク諸島への遠島が実施されていた約50年間は、Blankinshipの言う通り、アラビア半島方面で「大いなる安全」が実現していた時期なのであろう。すなわち、カリフ政権が紅海の制海権を握り、アクスム王国を圧迫する事で、ダフラク諸島がイスラム世界の域内に含まれていた時代、という事になる。しかし、この期間の前後の時代には、エチオピア系の人々（アクスムの王権と関係があるかどうかは不明）が敵対的な態度を示す事があり、紅海における政治的・軍事的主導権の行方は流動的だったのではないだろうか。そうだとすれば、カリフ政権によるダフラク諸島への遠島は、この方面が平



穏な土地柄だったから行われたというよりも、一時的に獲得された平穏な時期を選んで実施された、という事になる。その小さなパクス・イスラミカを実現させた直接の原因が、アラブ艦隊の活躍によるものか、アクスム王国の急速な衰退によるものか、具体的に判断するためには、今後の研究を待たねばならないだろう。

いずれにせよ、現存する多くの墓碑資料が示す通り、4/10世紀以降のダフラク諸島はアラブ＝ムスリムの本格的な入植を経験して、再びイスラム世界に復帰する。以後の同諸島は、シリアやイラクに政治的中心を置く帝国の最周縁部としてではなく、エジプトを中心とする巨大な交易ネットワークの基幹部として、新たな一步を踏み出していくのである。

- 1 「追放」を意味する史料上のアラビア語としては、nafy、tasyīr、ikhraj、taghrīb などがある。一方、iljā' という語は「集団の強制移住」を意味する事が多い。
- 2 例えば、30/650-1年に総督ムアウィヤ Mu'āwiyah b. Abī Sufyān によってメディナのウスマーンのもとに追放されたアブー・ザッル・アルギファーリー Abū Dharr al-Ghifārī のケースなどが挙げられる (Tabarī, I, 2858-62)。アブー・ザッルについては、Cameron, A. J., *Abū Dharr al-Ghifārī: An Examination of His Image in the Hagiography of Islam*, revised ed., London, 1982 を参照せよ。
- 3 33/653-4年に総督サイド・ブン・アルアース Sa'id b. al-'Āṣ と対立したクーファ民の一部が、シリアへ追放されたケースなどが挙げられる (Tabarī, I, 2909)。
- 4 例外として、妖術使いの嫌疑をかけられたカアブ・ブン・ズイー・アルハバカ Ka'b b. Dhī al-Habakah とマールク・ブン・アブドッラー Mālik b. 'Abdallāh が、ウスマーンによってダマーヴァンド (Dunbāwand) へ追放されたという伝承もあるが (Tabarī, I, 3033)、多分に伝説的な内容であるため真偽のほどは定かでない。
- 5 原文には Ἀλαλαίου とある。Casson, L., *The Periplus Maris Erythraei*, Princeton, 1989, pp.52-3; 蔀勇造「新訳『エリユトラ海案内記』」『東洋文化研究所紀要』132 (1997), 5頁。
- 6 原文には insulae quae Aliaeu vocantur とある。Pliny, *Natural History II: Libri III-VII*, (The Loeb classical library no.352), London, 1961, p.466 (Book VI. xxxiv. 173); 中野定雄ほか (訳)『プリニウスの博物誌』第I巻、雄山閣出版、1986年、283頁。
- 7 Insoll, T., *The Archaeology of Islam in Sub-Saharan Africa*, Cambridge, 2003, pp.49-51.
- 8 *Mekka*, vol.1, 98.
- 9 *Yāqūt*, vol.2, 492. なお、ダフラク諸島に関しては *Khurdādhbih*, 142; *Hamdānī*, 47, 52 にもその名前が言及されているが、具体的な情報は記載されていない。
- 10 *Khallikān*, vol.6, 300.
- 11 ヤズィード・ブン・アルムハッラブは、アズド族の名門ムハッラブ家から出た武将の一人。アブド・アルマリク治世の 82-5/701-5年にホラーサーン総督を務めたが、ハッジャージュ al-Hajjāj の反ムハッラブ家政策によって罷免。スライマーンの下でイラク地方のハルブ担当総督となり、次いでホラーサーン地方を管轄地域に含めたが、ウマルII世が即位するに及んで逮捕された。後の 101-2/719-21年に大規模な反乱を起こし、戦死。
- 12 *Tabarī*, II, 1351. 類似の伝承は、*Khallikān*, vol.6, 300 にも記載されている。
- 13 メディナで生まれたアウス族出身の詩人。曾祖父のアースィム・ブン・サービト・ブン・アビー・アル・アクラフ 'Āṣim b. Thābit b. Abī al-Aqlaḥ は、3/624-5年または 4/625-6年にラジーウ (al-Rajī') の戦いで殉教した

- 伝説的な教友 (*Hishām*, 638; *Ṭabarī*, I, 1431-6; *Aghānī*, iv, 40-3)。アフワスの生涯については、*EI*<sup>2</sup>, “al-AḤWAS” を参照せよ。
- 14 アフワスをダフラク諸島に追放したカリフは、ワリード I 世であるとも、スライマーン Sulaymān b. ‘Abd al-Malik (位 96-9/715-7 年) であるとも言われている (*Aghānī*, iv, 43)。
- 15 *Aghānī*, iv, 48-9. 同様の伝承は *Aghānī*, viii, 56 にも出てくるが、「棘草の地」という語句が「多神教の地 (bilād al-shirk)」になっている。アフワスの追放に関しては、他に *Ansāb*, vol.7, 128-9, 187 などに記事がある。
- 16 *Aghānī*, iv, 49.
- 17 23/644 年、メッカ生まれ。マフズーム家出身で、恋愛詩 (ghazal) の大家として知られる。
- 18 *Shu‘arā’*, 216.
- 19 *Aghānī*, viii, 56; *Muntaẓam*, vol.6, 316. Brockelmann, *G.A.L.*, GI, p.42 も、アフワスだけが追放されて、ウマル・ブン・アビー・ラビーアは釈放されたという説を採っている。
- 20 *Ṭabarī* に拠ると、この人物の本名は ‘Abd al-Wāhid b. ‘Abdallāh b. Bishr al-Naḍrī であり、元々はターイフ知事であったが、104 年シャウワール月 (723 年 3 月) にアブド・アッラフマーン・ブン・アッダッハーク ‘Abd al-Raḥmān b. al-Daḥḥāk の後任としてメディナ知事になった (*Ṭabarī*, II, 1449-52)。
- 21 *Tahdhīb*, vol.4, 108. 同様の伝承は、*Aghānī*, iv, 56-7 にも載っている。なお、アッラークのイスマムについては、イラク ‘Irāk と読む説もある。
- 22 *Ansāb*, vol.7, 187 に拠ると、そもそもアフワスがダフラクへ追放された時に、「証言 (shahādah)」をしたのがアッラークであったという。
- 23 *Dhahabī*, vol.5, 64.
- 24 *Aghānī*, iv, 53.
- 25 Abū Marwān Ghaylān b. Muslim al-Dimashqī. ダマスカスで、自由意志論を唱えるカダル派を率いた人物。解放奴隷の息子と言われているが、その生涯についてはよく分かっていない。嶋田襄平「ダマスカスのガイラーン」『初期イスラーム国家の研究』中央大学出版部、1996 年、61-75 頁; *EI*<sup>2</sup>, “GHAYLĀN b. MUSLIM” を参照せよ。
- 26 *Ṭabarī*, II, 1777-8. 類似の記述は、*Ansāb*, vol.7, 517 にも記載されている。
- 27 唯一、*Aghānī*, xix, 58 に、ヒダーシュ・アルキンディー Khidāsh al-Kindī なる人物がイラク総督ハーリド・アルカスリー Khālīd al-Qasrī に任命されたダフラクのアーミル (‘āmil) だった、と読める箇所がある。しかし、この短い文章は今ひとつ意味が不鮮明で、詳細は分からない。
- 28 *Ṭabarī*, III, 135.
- 29 Cuoq, Joseph, *L’Islam en Éthiopie: des origines au XVIe siècle*, Paris, 1981, p.41.
- 30 *Ansāb*, vol.3, 261. こちらの伝承では、エチオピア人に襲われた後、奴隷商人に買い取られ、メディナの市場で売られそうになったところを、知事アブド・アッサマド・ブン・アリー ‘Abd al-Ṣamad b. ‘Alī に保護された事になっている。
- 31 Oman, Giovanni, “The Islamic Necropolis of Dahlak Kebīr in the Red Sea: Report on a Preliminary Survey Carried out in April 1972,” *East and West*, New ser., 24-3/4(1974), pp.249-295. ダフラク諸島の考古学的資料については、他に Schneider, Madeleine, *Stèles funéraires musulmanes des îles Dahlak (mer Rouge)*, 2vols, Cairo: Institut français d’archéologie orientale du Caire, 1983 などを参照せよ。
- 32 Prouty, C. & E. Rosenfeld, *Historical Dictionary of Ethiopia*, Metuchen & London, 1981, p.44, 100.
- 33 D・T・ニアヌ (編) 『ユネスコ・アフリカの歴史：第四巻下・一二世紀から一六世紀までのアフリカ』、同朋舎出版、1992 年、624 頁。
- 34 *The Encyclopaedia of Islam*, New ed., “DAHLAK.”
- 35 ②『ユネスコ・アフリカの歴史』には典拠を示す註があるものの、そこには③ *The Encyclopaedia of Islam* を見よ、

- としか書かれていない。
- 36 Insoll, *The Archaeology of Islam*, p.51.
- 37 Cuoq, *L'Islam en Éthiopie*, pp.36-7.
- 38 *Mekka*, vol.2, p.44. 但し、この伝承は全くの孤証であり、他の史料に類似の記事は観察されない。83/702-3年は、イブン・アルアシュアスの反乱が最終局面を迎え、マスクン (Maskin) の合戦が行われた年に当たる。
- 39 Ullendorff, Edward, *The Ethiopians: An Introduction to Country and People*, Oxford, 1960, p.57 にも「イスラムがダフラク諸島を占領した」という記述があるが、こちらは典拠も脚註もなく、占領の具体的時期についての説明も無い。しかし、巻末のビブリオグラフィーに、後述する Trimingham の『エチオピアのイスラム』が記載されているので、その影響を受けている可能性はある。
- 40 Trimingham, J. S., *Islam in Ethiopia*, London, 1952, pp.46-7. 一方、エチオピア史研究の古典とも言うべき Wallis Budge の『エチオピア史』(1928年)は、ダフラク諸島の占領に関して一言も触れていない。Budge, E. A. W., *A History of Ethiopia, Nubia & Abyssinia*, vol.1, London, 1928.
- 41 Trimingham の主張そのものは、十分に説得力のある仮説と言えらるであろうが、これを確定事項として各種の事典や概説書に記載する事には、問題がある。この説はインターネット上に溢れるエチオピア・エリトリア史関連のサイトにも数多く紹介されており、極めて広範囲にひろがりつつあるからである。
- 42 *Aghānī*, xxi, 210-1.
- 43 *Zamakhsharī*, 50.
- 44 *Tāj*, vol.5, 20-1.
- 45 *Aghānī*, xxi, 212-5. この部分は *Ṭabarī*, I, 2312-6 の並行記事である。
- 46 *Aghānī*, xxi, 219. この部分は、恐らく *Ṭabarī*, I, 2388 に出てくる事件と同じであろう。
- 47 *Aghānī*, xxi, 220.
- 48 *Madīnah*, vol.1, 404; *Ṣafadī*, vol.17, 118.
- 49 *Ṭabarī*, I, 2479-80.
- 50 *Yāqūt*, vol.1, 324.
- 51 バーディウの位置をめぐる議論に関しては、Nawata, Hiroshi, “An Exported Item from Bādi‘ on the Western Red Sea Coast in the Eighth Century: Historical and Ethnographical Studies on Operculum as Incense and Perfume,” *Ethiopia in Broader Perspective: Papers of the XIIIth International Conference of Ethiopian Studies, Kyoto, 12-17 December 1997*, vol.1, Kyoto, 1997, pp.307-25 の p.308 が簡潔にまとまっている。
- 52 *Kāmil*, vol.2, 370. 同様の伝承は、al-Nuwayrī(d.733/1333), *Nihāyah al-Arab fī Funūn al-Adab*, <http://www.alwaraq.net/>, 2274 にもある。
- 53 *Yāqūt* には “Nāsi’” という独立した項目があり、「エチオピアの国にある (min bilād al-Ḥabashah)」と書かれている。この問題については、Caetani, L., *Annali dell'Islām*, repr. Hildesheim & New York, 1972, vol.3, pp.827-8 に簡単な説明がある。
- 54 *Ṭabarī*, I, 2377.
- 55 *Madīnah*, vol.1, 404. (前掲)
- 56 *Ya‘qūbī*, vol.2, 494. 類似の記録は、*Ṭabarī*, III, 1508; *Murūj*, vol.4, 145 などにもあるが、こちらはクレタ島に送られたとしか書かれていない。
- 57 *Murūj*, vol.4, 145; *Ya‘qūbī*, vol.2, 495; *Ṭabarī*, III, 1506. なお、*‘Iqd*, vol.5, 406 には、ウバイドッラー・ブン・ヤフヤー・ブン・ハーカーンがムタワツキルによってクレタ島に追放されたとあるが、これは情報の混乱による誤りであろう。官僚の名門ハーカーン家出身のウバイドウッラーは、ムタワツキルの治世に宰相を務めた後、ムスタイーン治世の 248/862-3 年にバルカへ追放されたが、後にイラクへ戻り、ムウタミド al-Mu‘tamid (位 256-79/870-92 年) の宰相を務めている。

- 58 *Faraj*, vol.3, 323 には、ワースイク al-Wāthiq( 位 227-32/842-7 年 ) がウバイドッラー・ブン・ウマル・アルバーズヤール ‘Ubaydallāh b. ‘Umar al-Bāzyār を「海 (al-bahr)」に追放したという逸話が出てくる。文中には、流刑地に「沙漠 (al-ṣahrā’)」があり、金曜礼拝をする「モスク (al-jāmi‘)」もあったと書かれていることから、この「海」が地中海 (Baḥr al-Rūm) を指しているとすれば、同様に北アフリカを想定している可能性が高い。無論、紅海沿岸である可能性も皆無ではない。
- 59 *Ṭabarī*, III, 1437. ブフティーシューは、ワースイク治世の 230/844-5 年にもジュンディーシャープールに追放されている (*Aṭibbā’*, 202)。
- 60 *Kāmil*, vol.7, 14.
- 61 Cuoq, *L’Islam en Éthiopie*, p.42. 脚註に挙げられている典拠は、Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, ed.Būlāq II, 202.
- 62 この史料の刊本は入手できず、WEB 上から引用した (*Fasawī-2*, 15)。現物を確認した *Fasawī-1*, vol.3 の索引によると、当該箇所は *Fasawī-1*, vol.1, 169 ではないかと推測される。なお、訳文では省略したが、原文中の yawm ‘āqil という語句の意味は不明である。
- 63 Cuoq, *L’Islam en Éthiopie*, pp.42-5.
- 64 Cuoq, *L’Islam en Éthiopie*, pp.49-52; Wiet, G., “Roitelets de Dahlak,” *Bulletin de l’institut d’Égypte*, 34(1953), pp.89-95. さらに後代のダフラク諸島に関しては、家島彦一『海域から見た歴史：インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会、2006 年を参照せよ。
- 65 Blankinship, Kh. Y., *The End of the Jihād State: The Reign of Hishām Ibn ‘Abd Al-Malik and the Collapse of the Umayyads*, Albany, 1994, p.74.